室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ブレイクのキリスト教と彼の芸術[1]—バガヴァット・ギーターの影響について—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狐野, 利久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/749

ブレイクのキリスト教と彼の芸術(1)

——バガヴァッド・ギーターの影響について——

狐野利久

Blake's Chrisianity and his arts

—— an influence of Bhagavad-gita ——

Rikyu Kono

Abstract

God in *Bhagavad-gita* has two aspects; one is an aspect of the absolute that is dualistically described as "Thou" in the relation between "I" and "Thou", and the other is an aspect of "Tathata" that usually indicates an uity or one-ness between "I" and "Thou" Blake's Christianity has something similar to *Gita*'s idea on God. Moreover, Blake has own terminologies to indicate his God, which he calls, for example, Poetic Genius, the True Man, Divine Humauity, Intellectual Fountain and so on. So when he says "he sings accroding to the inspiration of Poetic Genius", Blake and Poetic Genius are in the unity or one-ness because he says God becomes as we are, that we may be as is". It is such unity between Blake and Poetic Genius that, being independent and contradictory each other, should be called "the Marrige of Blake and Poetic Genius", from which Blake's arts are emancipated.

My conclusion is, therefore, that Blake's Christianity as well as his arts deeply depends on *Gita* translated by Charles Wilkins in 1785 and that he was probably sure of having read it by the time 1788, because his own works, *There is no Natural Religion* (circa 1788) and *All Religions are one* (circa 1788) have traces of *Gita*'s two aspects on God.

(1)

ブレイクには仏教の思想に似ているところがあるとよく言われている。例えば，山宮允先生は，ブレイクの有名な

To see a world in a Grain of Sand

And a Heaven in a Wild Flower,

Hold Infinity in the palm of your hand

And Eternity in an hour.

の詩句を，大方広仏華厳経（実叉難陀　訳）の世主如厳品第一の五にある言葉，即ち，

如来境界無辺際　一念法界悉充満　一一塵中建道場　悉証菩提起神変

（如来の境界は辺際無く，一念に法界は悉く充満し，一一の塵中に道場を建て，悉く菩提を証し神変を起こす）

とか，或いは，同じく如来出現品第三十七の二にある言葉，即ち，

雪山有薬王　名為無尽根　能生一切樹　根茎葉華実　仏智亦如是

如来種中生　既得菩提已　復生菩薩行..... 有大経巻

量等三千界　在於一塵内　一切塵悉然　（雪山に薬王有り，名づけて無尽根と為し，能く一切の樹の根茎葉華実を生ず。仏智も亦是の如し，如来種の中に生じて既に菩提を得已りて復菩提の行を生ず.... 大経巻あり。量は三千界に等しくして，一塵の内に在り，一切の塵も悉く然り。）

等と対比させて，ブレイクの考え方が仏教と似ていることを，はやくから指摘していることは衆知の通りである。

しかしながら，筆者としては，ただ単にブレイクの思想が仏教と似ているということで比べてみてもあまり意味のない事のように思えるので，仏教とは言わないまでも，広い意味でインド思想というものが，ブレイクに影響を及ぼしていないだろうかというように考えてみたのである。

すでに，英国では，アンソニー・ブランド教授（Prof. Anthony Blunt）が1943年の Journal of the Warburg and Courtauld Institute of Art の第6巻で，*Blake's Pictorial Imagination*, と題する論文を発表しているのであるが，その中で次のように述べているのである。

Indian sculpture was beginning to be known in England in Blake's time and specimens of it were to be seen in the British Museum, from which perhaps Flaxman drew the plate illustrating such work in his *lectures on Sculpture*. Further evidence is to be seen in Blake's allegorical painting of

"Pitt guiding Behemoth", in which the big halo decorated with figures and ending in a point at the top is purely Buddhist in type. (*Journal of the Warburg and Courtauld Institute of Art*, Vol. VI, pp.205-206, 1943)

(インドの彫刻はブレイクの時代にイギリスで知られ始めた。そしてその実例を大英博物館で見ることができたのだが，フラクスマンは彼の彫刻に関する講義においては，その実例から，おそらく，そのような作品を例証する版画をかいたにちがいない。さらに証拠としては，[巨獣を導くピット] と題するブレイクの寓話的絵において見られる。その絵には図柄で飾られた尖った先端をしている光輪が描かれているが，それはあきらかに特徴からいって仏教的である。)

又彼の著書「ブレイクの芸術（*The Art of William Blake*)」ではブレイクの「イエルサレム（*Jerusalem*）第3章のはじめのところにある「ひまわりの玉座についたベウラ（*Beulah Enthroned on a Sun-Flower*)」の構図は，ムア（*Moor*）の「ヒンズーのパンテオン（*Hindu Pantheon*)」からの借用であるとブラント教授は述べ，インド芸術の影響がブレイクにあったことを指摘しているのである。

そこでブラント教授の指摘するように，ブレイクの絵画にインド芸術の影響がみられるというのであれば，当然ブレイクの思想の上にも，何らかのインド思想の影響というものがあってしかるべきであると考えるのである[2)]。しかも，1809年の「展覧会のための目録（*Descriptive Catalogue*)」によれば，ブレイクはチャールズ・ウィルキンズ（Charles Wilkins）の訳になる「バガヴァッド・ギーター（Bhagavad-gita)」にもとづいて，「ブラーミンズ（*Bramins*)」と題する絵か何かをかいたようであるので，そうであるならばギーターを読んでいたことは確かであるし，又，絵か何かをかいたのであれば，ブレイクの思想の上に，何らかのギーターの影響があっても，当然のことと思うのである。

しかしながら，このように言ってはみたけれど，ブレイクの場合，彼に与えた影響という問題を論ずるのは，なかなか難しいことなのである。ブラント教授も彼の「ブレイクの芸術（*The Art of William Blake*)」の中で，

. . . . Blake's visual memory was so remarkable that, if he had once seen an image, it was retained in the great storehouse of his imagination, together with thousands of other images derived from nature, or other works of art, or the invention of his own fantasty. (*The Art of William Blake*, p.32, 1959)

(ブレイクの視覚的記憶力は非常に抜群であったから，一度イメージを見ると，そのイメージは自然から派生する多くのイメージや他の芸術作品，或いは，彼自身の空想の発明品と一緒に，彼の想像力の巨大な貯蔵庫の中に保管されていたのだと結論づけざるを得ない。)

と言い，更に又，

When he borrows a pose from some other artist, he so completely transforms the figure that it seems to be wholly Blakean and shows at first sight no trace of its alien origin. Indeed it seems probable that Blake was often unaware that he was borrowing, and, when he was once challenged on an individual case, he denied that he had ever seen the original which he was accused of imitating. (*Ibid.*)

(他人からポーズを借用する場合，完全にその姿をつくりかえてしまうので，全くブレイク的であるようにも見えるし，又，一見したところ，よそのところに原型があるという痕跡さえも示していないのである。だから，ブレイクは自分が他人のものを借用しているということも気が付かなかったこともしばしばであったということもありうるようであるし，又，他人のものを真似しているということが問題になった時でも，もとのものを見たことがないと否認したのであった。)

と言っているのであるが，本当にブラント教授の言う通りであって，例えば，エドモンド・バーク（Edmund Burke）の「崇高論（*A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful*)」のブレイクに与えた影響ということを考えてみても，ブレイクは一方においてバークの「崇高論」を批判しながら，他方においては彼の鋭い記憶力が，バークの二元的な崇高と美

の概念を友人であるフューゼリ（Henry Fuseli），バリ（James Barry），モーティマ（John Hamilton Mortimer），ストザード（Thomas Stothard）等の絵画を通して捕らえ，それを他の要素と共に彼の想像の中で消化吸収し，その結果，線を生命とする彼独自の，崇高にして美なる芸術を生み出しているのである。従って，ブレイクの絵画において以上のようなことが言えるのであるならば，ブレイクの思想の上においても，同じことが言えるはずである。即ち，ブラント教授の言葉を利用して表現するならば，次のようなことが言えるのであろう。

［聖書の旧約・新訳のみなず，カバラ思想やギリシャ思想等と一緒にスエーデンボルグの思想やバガヴァッド・ギーター等にみられるインド思想も，彼の巨大な想像力の貯蔵庫の中に保管され，そこで消化されて，彼の血となり，肉となった結果，出来上がったものが，彼独特の思想であったのだ。］

しかしながら，そのように言ってはみても，例えば，神と人間の関係を一如という関係で捕えている彼特有の思想，具体的に例をあげれば，

Man is lmagination. God is Man & exists in us & we in him. （人間はすべて想像である。神は人間であって，われらの中に住みたまい，われわれも彼の中に住むのである（*Annotations to Berkeley's Siris*））

とか，或いは又，

I am not a Got afar off, I am a brother and friend;
Within your bosoms I reside and you riside in me. (*Jerusalem*.)
（われは遠く離れたところにいる神ではない，われは兄弟であり友である。われは汝の胸中にあり，又，汝はわれの中にいるのだ）

は，ウイルキンズの訳した「バガヴァッド・ギーター」からきているように思えてならないのである。

(2)

ではいつごろブレイクはウイルキンズの訳した「バガヴァッド・ギーター」を読んでいたのかということになるのであるが，このことについては研究者の間で色々意見が異なるようである。例えばキャサリン・レイン（Kathlen

Raine）は *Blake and Tradition* の中で，ブレイクはおそらく「ロスの書（*The Book of Los*）」が出た1795年までにはウイルキンズのギーターを読んでいたであろうと言っている。又，ジョン・アドラード（John Adlard）は1964年の *English Studies* に発表した論文 *Blake and Geeta* で，ブレイクの「天国と地獄の結婚（*The Marrige of Heaven and Hell*）」にギーターの影響があるということを論証しているのであるが，「天国と地獄の結婚」は1790年から93年までの間のものといわれているので，それ以前にブレイクはギーターを読んでいたということになるのである。

このアドラードという人は，インド思想の上において重要な作品である，この「バガヴァッド・ギーター」がどのようにブレイクの「天国と地獄の結婚」に影響を与えているかを色々と考察しているのであるが，例えば次のようなことを言っているのである。

> Kreeshna argues against conciliation. Did this remind Blake of Jesus, whom he quotes, in the eleventh section, as coming 'not to send Peace, but a Sword', because the 'two classes of men . . . should be enemies: whoever tries to reconcile them seeks to destroy existence?'
>
> (*Blake and 'Geeta'*, from ENGLISH SHUDIES, 1964)

彼の言っていることを少々補足して説明すると，「天国と地獄の結婚」の Plate 15～17のところの「幻想録（Memorable Fancy）」の終りのところに，

> Jesus Christ did not wish to unite, but to separate them, as the Parable of sheep and goats! & he says: "I came not to send Peace, but a Sword." （イエス・キリストは，羊と山羊のたとえ話しにあるように，彼らを融合するのではなくて分離させようとおもった。そうして，彼は言った。[私は平和ではなく，つるぎを投げ込むために来たのである，] と。）

という言葉をブレイクは註として入れているのである。これは「マタイによる福音書」第10章34節からの引用なのであるが，アドラードによれば，「ギーター」の第１章のところで，アルジュナ（Arjoon）が今敵味方に分かれて戦わんとする同族の陣容を見渡して，地上の主権を得んがために，同族が敵味方に

分かれて血で血を流す愚かさ，無意味さを嘆くとき，クリシュナ（Krishuna）が臆病をふりはらって義務を遂行せよと激励するのであるが，ブレイクはそこら辺りを読んだ時，この「マタイによる福音書」第10章34節のところを思い出して，ここのところに註として入れたものであろうと言う訳なのである。又，アドラードは，例えば「天国と地獄の結婚」にある有名な言葉の一つ，

If the doors of perception were cleansed every thing would appear to man as it is, infinite. For man who closed himself up, till he sees all things thro' narrow chinks of his cavern.（もしも知覚の扉が浄められるならば，あらゆるものが人間にとってありのままに無限に見えるであろう。自分を閉じ込めている人にとっては，彼の洞窟の隙間からあらゆるものを，遂にみることになる。）

を「ギーター」の次のような言葉，

He who, having closed up all the doors of his faculties, locked up his mind in his own breast, ... shall . . . without doubt go the journey of supreme happiness. (Lecture VIII)（一切の門を閉じ，（意）を心の中に閉塞する者，. . .，彼は最高の帰趨（gati 解脱）に達す。）

と対応させたり，又，

This is shewn in the Gospel, where he prays to the Father to send the Comforter, or Desire. . . .（これは福音書に示されている。それによると，彼は，慰める者，即ち欲望を送られんことを［父］に祈った。）

を「ギーター」の

"I am . . . the comforter," says Kreshna. (Lecture IX)（われは. . . 支持者なり］とクリシュナは言えり）

と比べたりして，「天国と地獄の結婚」の成立に「ギーター」が深く係わっていることを述べているのである。このようなアドラードの主張から考えると，ブレイクが「ギーター」を読んだのは1790年以前ということになるわけである。

(3)

筆者は，もっと早く，1788年までにはブレイクは「ギーター」を読んでいた

はずだと考えているのである。なぜなら，1788年頃にブレイクがかいている *There is no Natural Religion* や *All Religions are One* に「ギーター」の影響があると考えているからである。例えば，*There is no Natural Religion* の中で，ブレイクは，

> He who sees the Infinite in all things, sees God. He who sees the Ratio only, sees himelf only. Therefore God becomes as we are, that we may be as he is. (一切のものに無限を見る見る者は神を見る。比率のみを見る者は彼自身のみを見る。それ故，我々が神のごとくなるためには，神は我々の如くになるのだ。)

と言っているのであるが，このような考えは，「ギーター」において説かれている梵我一如の思想からきているのではないかと思うのである。例えば「ギーター」の Lecture IX で，クリシュナは，

> I am the same to all mankind: there is not one who is worthy of my love or hatred. They who serve me with adoration. I am in them and they in me. (Charles Wilkins' "*Bhagavad-geeta*, Lecture IX, pp.81-82, 1785.) (以下のギーターの英文はすべて1785年に出版された Charles Wilkins の英訳によるものである。)
>
> (われは一切万物に対して平等なり。われにとり憎むべき者なく，愛すべき者なし，されど誠信 (bhakuti) をもってわれを敬愛する者，彼らはわれの中あり，われまた彼らの中にあり。——辻直四郎氏　訳——　以下の和訳は同氏の梵文からの和訳によるものである。)

と梵我一如を説いているが，このようなところをブレイクは読んでいたからこそ，神人一如というブレイク独特の考え方が生まれてきたと思うのである。

このように言うと，ブレイクの神人一如の思想，或いは神人合一の考え方というものは，スェーデンボルグ (Emanuel Swedenborg) からきているのではないかという反論があるかもしれない。確かに，*There is no Natural Religion* や *All Religions are One* を書いた頃のブレイクはスェーデンボルグの教えに関心を持っていたようであるし，1789年 4 月13日 The New Jerusalem と名付けら

れる教会創立のための，信徒の集会がロンドンで開かれた時，ブレイクは妻と共にその集会に出席していたことが，出席者名簿の中にブレイク夫妻の名前があることからも，関心を持っていたことが裏付けされるので，一応はスェーデンボルグの影響ということも考えてみなければならないであろう。

スェーデンボルグの思想はCorrespondenceとInfluxの二つから成り立っているといわれている。即ち，例えば，彼の著書の一つである「天国と地獄(*Heaven and Hell*)」をみてみると，

113. As All things which are in accord with divine order correspond to heaven, so all things contrary to Divine order correspond to hell. All things that correspond to heaven have relation to good and truth; but those that correspond to hell have relation to evil and falsity.

[113. 神的秩序に順応したすべての物は天界に相応しているように，神的秩序に反したすべての物は地獄に相応している。天界に相応した物はすべて善と真理に関連しているが，地獄に相応した物は悪と偽りとに関連している。]

従って，地獄というものは，

193 . . . the hells are entirely separated from the heaven, because they are in a contray state.

[193 ... 地獄は天界からは全く分離している。なぜならそれらは相反した状態にいるからである。]

ということであり，又，

442 . . . The state of heaven in man is the conjunction of good and truth in him; and the state; of hell is the conjunction of evil and falsity in him. . .

[442 ... 人間における天界の状態とは人間の中に善と真理とが連結することであり，地獄の状態とは人間の中に悪と誤りとが連結することである...]

そこでこのようなCorrespondenceの思想から，Influxの思想が出てくるので

あるが,

543 How the hells are ruled by the Lord shall be briefly explained. In general the hells are ruled by a general outflow from the heavens of Divine good and Divine truth whereby the general endeavor flowing forth from the hells is checked and restrained; also by a particular outflow from each heaven and from each society of heaven. The hells are ruled in particular by means of the angels, to whom it is granted to look into the hells and to restrain insanities and disturbances there; and sometimes angels are sent to them who moderate these insanities and disturbances by their presence. But in general all in the hells are ruled by means of their fears. Some are ruled by fears implanted in the world and still inherent in them; but as these; fears are not sufficient, and gradually subside, they are ruled by fears of punishments; and it is especially by these that they are desterred from doing evil. . . . .

[543 しかし地獄はいかように主により支配されているかもまた，かんたんに述べなくてはならない。地獄は全体として諸天界から神的善と神的真理とが全般的に流れ入っていることにより支配され，それにより，地獄から発出してくる全般的な努力が抑圧され，同じく各天界から，また天界の各社会から特別に流出してくる神的善と神的真理とにより抑制されている。地獄は個別的には天使達を通して支配されており，その天使達に地獄を凝視して，その狂気と暴動とを抑制することが与えらており，特にはまた天使達は彼らのもとにつかわされて，そこに現にいることによって，その暴動をしずめている。しかし，全般的には地獄にいるすべての者は恐怖により支配され，ある者は，世にいたとき植え付けられて，今もなをその者にとりついている恐怖により支配されているが，しかしこの恐怖は充分なものではなく，また徐々に減退して行くため，彼らは刑罰の恐怖により支配され，主としてそのことによって悪の実行を思いとどまっている。]

従って，神からの働きかけ（Influx）によって，何が善であり，何が真理であ

るかということをよく分別して，悪を避けて善を行なっていくことが，神と共にある，神と一体であるということになるのであって，ここにスェーデンボルグの神と人間の合一という思想が成り立っているのである。このようなスェーデンボルグの思想は，ブレイクにしてみれば，自然宗教（Natural Religion）であり，そして又，スェーデンボルグの説く神はエホバ・サタン（Jehovah-Satan）の何ものでもなかったはずである。むしろブレイクにしてみれば，

Good & Evil are here both Good & two contraries Marriage.

［善も悪もここでは共に善であって，二つは矛盾したまま結婚している］

(*Annotaions to Swedenborg' Divine Love*)

ということなのであって，天国が地獄を，善が悪を.... というような関係で，一方が他方を支配するというようなかたちで，神人合一，ブレイク的に言えば人間と神との結婚がなされているのではないのである。

(4)

では，その善悪の問題についてであるが，「ギーター」ではどのように教えているのであろうか。クリシュナはアルジュナに，

Let the motive be in the dead, and in the event. Be not one whose motive for action is the hope of reward. Let not thy life be spent in inaction. ("Geeta", Lecture II, p.40)

（汝の関心をただ行作にのみあらしめよ。決して［その］結果にあらしむるなかれ。行作の結果を動機たらしむるなかれ。［されど］汝は無作にも執着するなかれ。）

と言っている。我々は善いことか悪いことかを良く考えて行動することが大事なことであると思っているし，又，そのようにも教えられてきているのであるが，相対的に考えて行動する場合は，どうしても自我中心的な考え方になりがちなので，「ギーター」ではこのように結果を考えて行動を起こしたり，或いは結果が行動の動機になってはいけない，相対的な考え方を離れて，無我でやれと教えているのである。そして，そのためには，ブッディ・ヨーガを修練するようにというのである。なぜなら，

Men who are endued with true wisdom (buddhi-yoga) are unmindful of good or evil in this world. ("Geeta", Lecture II, p.40)
(ブッディ・ヨーガを修練せるものは，この世において善業も悪業も二つながら捨離す。)

ウイルキンズはブッディ・ヨーガを，このように，true wisdom と訳し，註として，

Whenever the word wisdom is used in this Translation, is to be understood *inspired wisdom*, or a knowledge of the Divine Nature.

と説明しているが，要するに，「心の修練」と言うことなのである。そうして，

Wise men, who have abandoned all thought of the fruit which is produced from their actions, are free from the chain of birth, and go to the regions of eternal happiness. ("*Geeta*", Lecture II, p.40) (ブッティにより修練せる賢人は，行作より生ずる結果を捨て，生の繋縛を脱して，無患の境地（解脱）に達すればなり。)

このブッディ・ヨーガ（ウイルキンズの訳によりば，true wisdom ということになるのであるが）を修練すれば，

I am the soul which standeth in the bodies of all beings. I am the beginning, the middle, and the end of all things.("*Geeta*", Lecture X, p.85)
(われはアートマンにして，一切万物の心に住す，われは万物の太初にして，かつ中間，また実に終末なり。)

とか，

Amongst the faculties I am the mind. (*Ibid.*)
(われは感官の中における意なり。)

とか，

I am the Meroo amongst the aspiring mountains. (*Ibid.* pp.85–86)
(われは山岳の中におけるメール（須弥山）なり。)

とか，

. . . and amongst floods I am the ocean. (*Ibid.*)

（われは湖水の中における海なり。）

. . . I am the monosyllable amongst words. (*Ibid.*)

（われは声の中の一音節なり。）

Of all the trees of the forest I am the Aswattha. (*Ibid.*)

（一切の樹木の中におけるアシュヴァッタ（菩提樹）なり。）

. . . amongst rivers I am Ganga. (*Ibid.*)

（われは河川の中におけるガンガー河なり。）

等々と言うことになり，

I am, in like manner, O Arjoon, that which is the seed of all things in nature; and there is not any thing, whether animate or inanimate, that is without me. (*Ibid.* pp.85–86)

（さらにまた一切万物のいかなる種子にもあれ，それはわれなり，アルジュナよ，万物の動くもの動かざるもの，われなくして存在しうるものはなし。）

と言うことになるのである。従って，本当に「ギーター」の説くこのブッティ・ヨーガ，即ち，true wisdom を修練すると，ブレイクの言うように，「善も悪も，ここでは善であって二つは矛盾したままで結婚している」ということになるし，この考えが発展していくと，後期の作品である「ジェルサレム（*Jerusalem*）」にみられるような

. . . all are Men in Eternity, Rivers, Mountains, Cities, Villages,
All are Human, & when you enter into their Bosoms you walk
In Heavens & Earths, as in your own Bosom you bear your Heaven
And Earth & all you behold; tho' it appears Without, it is Within,
In your Imagination, of which this World of Mortality is but a shadow.

(*Jerusalem*, Plate 71)

（永遠界においては，すべて人間，河も山も町も村も，すべて人間である。そうして君がそれらのものの胸中に入ると，君の胸中に天地を有するごとくに，天上や地上を歩むのである。君が見るものすべて，外界に存するよ

うに見えるが，君の内にあるのであり，君の想像にあるのであって，現象界はその影響にしかすぎない。）

という壮大な思想になるのである。このような，いわば，一切のものは一如である，地獄も悪魔も皆，尊い存在なのであるというブレイクの考えは，それ故，スェーデンボルグの思想からはどう考えても出てくるはずがないのであって，むしろ，ウイルキンズの訳した「ギーター」に負うところが大きいと言わざるを得ない。

更に「ギーター」がブレイクの上に大きなインパクトを与えていると言えることは，ブレイクが妻と一しょに The New Jerusalem という名の教会創立のための集会に出席した1789年に，彼は *Songs of Iunocence* という詩集を出しているのであるが，その詩集の中に，*Night* という詩があるからである。この詩をみてみると，柔和な心を持った狼や虎や獅子と羊達との平和な共存が，神の愛のなかで創造されたことが歌われている。これは，旧訳聖書のイザヤ書の第11章からきていると思われるのであるが，「ギーター」の一切のものは一如であるという思想をブレイクは読んでいたからこそ，イザヤ書第11章に説かれている対立するものの調和と融合の世界をブレイクが思い出して，*Night* という詩が作られたというように考えられるのである。*Night* という詩にも「ギーター」がかかわっていると考えてみるならば，ブレイクがウイルキンズの訳になる「バガヴァッド・ギーター」を読んだ年月は，アドラードの説よりも更に早くなることになる。

サブリ・タブリジイ（G. R. Sabri-Tabrizi）は彼の著書「ブレイクの天国と地獄の結婚（*The Marriage of Heaven and Hell of William Blake*）」の中で，

> Closer examination of Blake's early writing can also show that the 'thought' of contraries in *The Marrige* was not derived from Boehme. Blake had acquired knowledge through his own experience. (p.98)
>
> （ブレイクの初期の作品をつぶさに調べてみると，［天国と地獄の結婚］における対立の“思想”はベーメからきているのではない。ブレイクは彼自身の経験を通して得た知恵なのだ。）

と言っているが，このような善と悪との結婚，神と人間の結婚というような，いわば対立し，矛盾し合うものが，そのままの相で和するというような，ブレイクの一如の思想は，サブリ・タブリジイの言うように，「彼自身の経験」から得たものでは決してないのであって，今まで論じてきたことからも解るように，筆者は「ギーター」からきているのであると言いたいのである。サブリ・タブリジイは「天国と地獄の結婚」の中に出てくるリントゥラ（Rintrah）という名前を，1789年にサー・ウイリアム・ジョーンズ（Sir William Johns）が初めて英訳したインドの古典文学の一つである「シャクンタラー（*Sakuntala*）」の中のインドラ（Indra）からきていると言って，ブレイクが「シャクンタラー」を読んでいたと言っているが，筆者は疑問に思っている。

(5)

さて「ギーター」にはこのような神人一如という面のほかに，もう一つ，創造者として人間の前に立つ，いわば，絶対者としての一面がある。それは「我と汝」という二元論的，対立的に考えられる場合の神の一面である。

I am the creator of all things and all things produced from me.

(“*Geeta*”, Lecture X, p.84)

（われは一切の本源なり，一切はわれより転現す。）

The great *Brahm* is my womb. In it I place my foetus; and from it is the production of all nature. (“*Geeta*”, Lecture XIV, p.107)

（わが胎は大梵なり，その中にわれは胎子をおく。一切万物の発生はそれよりおこる。）

The great *Brahm* is the womb all those various forms which are conceived in every natural womb, and I am the father who soweth the seed.

(*Ibid.*)

（一切の胎においていかなる形態が発生するとも，大梵はその胎なり，われは種子を与うるなり。）

このように，創造者であるが故に，又，絶対者でもなければならない。

I am . . . the destroyer of mankind, matured, come hither to seize at once

all these who stand before us. ("*Geeta*", Lecture XI, p.93)
(われは... 強大なる世界の破壊者なり，もろもろの世界を破壊すべくここに出動せり。)

なぜ，このような絶対者という一面が「ギーター」の神にあるのであろうか。その理由は，

With thy heart place all thy works on me; prefer me to all things else; depend upon the use of thy understandings, and think constantly of me; for by doing so thou shalt, by my divine favor, surmount every difficulty which surroundeth thee. But if, through pride, thou wilt not listen unto my words, thou shalt undoubtedly be lost. ("*Geeta*", Lecture XVIII, p.132)
(心により一切の行作をわれに遠離し，われに専向し，[理性] による心統一に依止し，常に心をわれに向けてあらば，汝はわが恩恵により，一切の困難を越ゆべし，もしもまた汝 [我執] により耳を傾けずんば，汝は滅亡すべし。)

ということだからである。筆者は，ブレイクの場合にも，「ギーター」と同じように，我と汝という二元論的に，対立した形で捕らえられる場合の，絶対者であり創造者である神の考えがあると思っている。その場合の神を，ブレイクは自分の外に在るものとしてではなく，自分に内在するものとして考え，それを「Poetic Genius（詩的天才）」と名付けているのである。即ち *All Religions are One* の中で

. . . the Poetic Genius is the true Man and the body or ourward form of Man is derived from the Poetic Genius. Likewise. . . the forms of all things are derived from their Genius. (詩的天才は真人であり，人間の肉体又は外形は詩的天才から生じたものである。同様に一切の形態もそれらの天才から生じたものである。)

The Religions of all Nations are derived from each Nation's different reception of the Poetic Genius. (あらゆる民族の宗教はそれぞれの民族が詩的天才をそれぞれ違った形で受け入れるところから起こったものである。)

As all men are alike (tho' infinitely various), So all Religions &, as all similars, have one source. The true Man is the source, he being the Poetic Genius.（あらゆる人間が無限にことなりながら同一であるように，一切の宗教も同じであって，あらゆる類似のものが同一の根元を持っているように，一つの根元を有するのである。真人は一切のものの根元であり，彼は詩的天才である。）

等と，ブレイクは言っている。「ギーター」によると，

And thus being as *Brahm* his mind is at ease, and he neither longeth nor lamenteth. He is the same in all things, and obtained my supreme assistance; and by my divine aid he knoweth fundamentally, who I am, and what is the extent of my existence; and having thus discovered who I am, he at length is absorbed in my nature. ("*Geeta*", Lecture XVIII, p.132)

（ブラフマンと合一し，心平安に帰したる者は憂えず，望まず，一切万物に対して，われに対する最高の誠信を得，誠信によって彼はわれを知る。われがいかに大いなるか，またわれが真に何ものなるかを，われを如実に知り，しかるのち彼は直ちに［われに］に入る。）

とある。ウイルキンズはこの誠真（bhakti）という言葉を，my supreme assistances とか，my divine aid とかと訳しているのであるが，彼の bhakti に対するこのような訳語を，ブレイクの Poetic Genius という言葉と比べてみるならば，とても興味深いと思うのである。なぜなら，ブレイクは，例えば「ミルトン（*Milton*）」のなかで，

I Sing According to the inspiration of the Poetic Genius who is the eternal all protecting Divine Humanity.（私は詩的天才の導きによって，歌をうたう。なぜなら詩的天才は聖なる人間性をすべてまもる永遠なるものだからである。）

と言っているが，この例をみても，Poetic Genius はまことに my supreme assistances であり，my divine aid であるのであって，クリシュナのように，ブレイクの神は，

I am the destroyer of mankind. . . . .

と言うように強い言葉は使ってはいないけれど，詩的天才に服従し，詩的天才の命ずるまま，筆をとる時，はじめて立派な芸術作品は生まれるからである。パウロが「われ生くるにあらず，キリストわれに在りて生くるなり」（ガラテア２章20節）と言っているが，パウロの言ううちなるキリストは，ブレイクの場合は詩的天才に外ならないから，詩的天才によって生きていくという点において，ブレイクは詩的天才に絶対性を置いているわけである。それ故

> And tho' I call them Mine, I know that they are not Mine, being of the same opinion with Milton when he says That the Muse visits his Slumbers & awakes & governs his Song when Morn purples the East.
>
> (*The Letter to Dr. Trusler*)
>
> （これらの作品を，私のものだとは申しますけれど，しかしそれらが私のものでないことを知っています。丁度ミルトンが暁が東の空を東雲にする頃ミューズの神が彼の眠りを訪れ，彼を目覚まし，彼に歌をつくらせたといったのと同じ心であります。）

とブレイクは言っている。「ローマ書」15章18節に，パウロがした宣教の業は，パウロを通してキリストがおこなったのだというようなことが書かれているが，ブレイクの場合も詩的天才がブレイクを通して詩や絵をかかせるわけである。「ギーター」では誠信（bhakti）を得た人を理想の人，最も神の本質に適した人と言われているのであるが，ブレイクは，そういう点で，誠に「ギーター」の理想とする「誠信を得た人」といった感じがするのである。

(6)

以上のように考察してくると，「ギーター」の神には，神と人間の関係を一如として捕らえられる場合の神と，「我と汝」というような二元論的な，対立的な形でとらえられる場合の，創造者，絶対者としての神の，二つの面があって，論理的に何か矛盾しているようにみえるのであるが，それが矛盾したようにみえないというのが「ギーター」の神の特色である。辻直四郎先生は，信仰という面から言うと，何ら矛盾は感じられないものであるというように言って

いるのであるが，丁度，同じことがブレイクの場合でも言えるのである。即ち，芸術家としてのブレイクの上に，神と人間の結婚という形で捕らえられる神と，人間の根源としての絶対者，創造者としての神（即ち，詩的天才）の，二面があって，それらは何ら矛盾せずに同居しているのである。更に，前述のブラント教授の意見を参考にして，ウイルキンズ訳の「ギーター」がどのようにしてブレイクに受容されていったかを考えてみると，ブレイクの想像力によって，「ギーター」の「万物の本源であるブラーフマン」がキリスト教における神についての伝統的思想と一緒になり，更に彼の中で消化吸収されて彼の血となり肉となりして，そこから彼独自の Jesus Christ でもあり，True Man でもあり，Poetic Genius でもあり，また，Divine Humanity でもあるというブレイクの神が形成され，その神と結婚し，合一し，服従することによって，真の芸術が生まれるのであるという，ブレイクの芸術論が出てくるのである。いいかえれば，ブレイクの神には神と結婚し合一することによって，悪とか罪が許されるという，いわば，continual forgiveness of sin であるイエス・キリストとしての面と，芸術を生み出す根元としての絶対性をもった創造者としての面とがあって，この二面が，二にして一，一にして二という状態にあるから，Divine Humanity とも名付けられたのであろうが，こういう状態の中から彼の芸術作品は生まれてくるのであるから，ブレイクの芸術作品は，いわば，神なる Poetic Genius とブレイクの結婚によって作られた結晶であると言えるわけである。そのように理解すると，

Art is the tree of Life, God is Jesus. (*The Laocoon*)

ということも，

The Old and New Testaments are the Great Code of Art. (*Ibid.*)

ということも，当然のことなのである。そうして，

A Poet, a Painter, a Musician, an Architect; the man or woman
Who is not one of these is not a Christian. (*Ibid.*)

（詩人，画家，音楽家，建築家，男も女もこの中の一つでないならば，その人はキリスト教徒ではない。）

は，正に，ブレイクのキリスト教がブレイクの芸術論であり，彼の芸術論が彼のキリスト教となっていると言うべき一つの例であって，いわば壮大なブレイクの宗教芸術論とも言うべき考えが現われていると思うのである。このようなブレイクの宗教芸術論は，元をたどれば，実に，ブレイクが若い頃に読んだ，インドの「バガヴァッド・ギーター」からの影響であったと結論するものである。

このように考察してくると，ブレイクのキリスト教思想というものが，東洋的で，異端のようにみえるのであるが，ブレイクの銅版画「ヨブ記への挿絵（*The Illustrations of the Book of Job*）」の第一図に「コリント人への第二の手紙」第3章6節の，

The Letter Killeth / The Spirit giveth Life.

文字は人を殺し，霊は人を生かす

を引用して，飾り枠の下のところに記し，「文字につかえる者ではなく，霊につかえる者」として，このブレイクの「ヨブ記への挿絵」を読むように我々読者に，真っ先に注意を促していることから考えてみると，案外ブレイクは自分の信仰が異端と受け取られることを知っていたかも知れない。筆者はブレイクのいうように，「霊に仕える者」としてブレイクをみるとき，真のキリスト者ブレイクを感じないわけにはゆかない。そうして，彼のキリスト教が東洋的であり，仏教の思想と似ていると思われる点があればある程，「すべての宗教は一つである」というブレイクの主張が認められることにもなるのである。

（註）

(1) 本稿は日本英文学会の原稿審査を経て，第59回大会で発表したものである。

(2) 江藤淳氏は，著書『夏目漱石』の中で，次のように言っている。

「異質な文化の理解というものはまず絵画や美術工芸を通じておこなわれることが多い。これは美術が文学より普遍性が高いからというよりも，その性質上直接かつ包括的に感覚にうったえて来るからである。だとすれば，漱石がメレディスやオーステンに知的に影響されるよりさきに，右にあげたようなラファエル前派の文人画家たちに感覚的・気分的に影響されなかったはずがない。少なくとも漱石は，彼らの設定した時流を呼吸し，彼らが生きた都会の一隅で生活していたのである。

そういういわば無意識のうちにおこなわれる影響，知らず識らずのうちに感受性に浸透してなにかをさそい出してしまうような影響の所在を，念頭に置いてみることは決して無駄ではない。」pp.347～348. 新潮社，昭54. このような江藤氏の言葉は，ブレイクに及ぼしたインドの芸術の影響ということを考える上で，参考になると思うのである。